

若者中心に広がる薬物依存症

突き放し最善の治療法

覚せい剤、大麻、合成麻薬などによる薬物依存症が若者を中心に広がっている。薬が切れると強い離脱症状が起き、心身に異常を来す人は全国で推定250万人に上るといわれる。19歳で覚せい剤に染まった長男(29)を持つ「県薬物依存症者を抱える家族の会」世話人、小西憲さん(59)川口町西川口と妻美代子さん(54)は、壮絶な経験から「親が愛情を込めて面倒をみるのではなく、突き放すことが最善の治療法」と断言する。だがそう話せるまでには5年の歳月がかかった。

【根本太一】

「家には入れない」出て行くと、「車で送る」。02年2月のある寒い夜、川口町のJR越後川口駅の小さな待合室で、憲さんは震える声で「家に帰りたい」となおも救いを求める長男に使い捨てカイロだけを渡して、1人戻るよう説得し続けていた。

「なぜ？ 息子だろ。買ったって始末に乗ったと駅員が自殺をほめかして知らされた。長男は2日後の夜に自宅に戻ってきた。長岡駅方面行きの最終電車が野宿をしていたらし

「家族の会」世話人・小西さん



「突き放すことが愛情であり、最良の治療」と話す小西憲さん(右)と妻美代子さん

い。玄関をたたいて「入れて」と叫んだが、憲さんは鍵を開けなかった。同居の義母は泣きながら「それでも親か」となじったが心を鬼にした。そして警察に保護を依頼した。狭い集落をパトカーの赤色灯が照らした時にはもう涙は枯れていた。

甘やかしは愛情ではない

◇ ◇ ◇
後、医師に見放された。

長男の異常を察したの東京市内の専門学校に入学して1年後の97年。半年で退学していたことが分かり、新潟に連れ帰って通院させたが、1年

療センターへの入院を勧められた。入院後、脱走を繰り返した上、看護師の詰め所から抗うつ剤を盗んだり、患者の薬もかすめた。通院時には薬局から風邪薬も万引きした。市販の

「東京で覚せい剤をやっていたそうです。薬物依存症です」と知らされた。深夜のアルバイト仲間誘われ、薬を始めたらしい。医師から県立精神医療センターへの変更を勧められた。先月18日手紙が届き、B5判1枚の便せんに「自分分は、自分の歩幅で歩いていきます」としたためた。憲さんは長男を施設に追い返して間もなく、同

「東京で覚せい剤をやっていた」と知らされた。深夜のアルバイト仲間誘われ、薬を始めたらしい。医師から県立精神医療センターへの変更を勧められた。先月18日手紙が届き、B5判1枚の便せんに「自分分は、自分の歩幅で歩いていきます」としたためた。憲さんは長男を施設に追い返して間もなく、同

「東京で覚せい剤をやっていた」と知らされた。深夜のアルバイト仲間誘われ、薬を始めたらしい。医師から県立精神医療センターへの変更を勧められた。先月18日手紙が届き、B5判1枚の便せんに「自分分は、自分の歩幅で歩いていきます」としたためた。憲さんは長男を施設に追い返して間もなく、同

い、万引きしたと分かれる。施設を出ることも可能だが、家族は追い返すよう指導されている。「甘やかしは愛情ではないんです。親が毅然としていないと、彼はずっと『半殺し』の状態なんです。本人も家族も『共倒れ』してしまいます」と憲さんは確信している。

「Drug Addiction Rehabilitation Center」(薬物依存症回復センター)の頭文字を取った民間リハビリ施設。担当者の言葉は「この病気は治りません。行き先は、病院か刑務所か、遺体置き場か。ただ『自律』への道も残されていると

「親の愛情が足りなかった」。美代子さんは自分を責めた。「私が救ってあげる」。病院を見舞

「親の愛情が足りなかった」。美代子さんは自分を責めた。「私が救ってあげる」。病院を見舞